

パートⅠ 日本の農村開発に農村研究の果たした役割

宮本常一と農山漁村振興―地域の主体的な開発を目指して

松井和久

地球の四周半分に当たる一六万キロメートルをのべ四〇〇〇日余かけて、日本各地を歩いた一人の男がいる。「彼の足跡を赤インクで記すと、日本地図が真っ赤になる」と言われたほどである。これはちよつと大袈裟かもしれないが、おそらく、これまでの誰よりも、そしてこれからの誰よりも、日本の農山漁村を、そしてそこに生きる人々を知り尽くした人物に違いない。

その男、宮本常一が今、日本で静かなブームになっている。ノンフィクション作家の佐野真一や中国新聞記者の佐田尾信作らの著作により、ここ数年の間に、一般にも知られてきた。過去の古き良き日本を振り返る昨今の昭和三〇年代レトロ・ブームもそれを後押ししている。

宮本常一（一九〇七―一九八一年）は、日本全国を回って様々な人々から聞き書きをし、膨大な量の筆記記録や写真を残したユニークな記録者・民俗学者である。同時に、出会った人々に他の農山漁村の話インプットし、自らの地域を主体的に改善しようと努力する人々を激励・鼓舞した地域開発の助言者・実践者でもあった。この両

面は有機的に結びついており、フィールドワーカーとファシリテーターの双方が融合した形として、開発途上国における開発やそれへの支援・協力を考えるうえで、有益な示唆や教訓を与えてくれる。

●宮本常一の略歴

宮本常一は周防大島の農家の生まれである。家は貧しく、また彼の青少年時代は苦しみの連続であった。周防大島自体が戦前から多数の移民を海外へ送り出してきた厳しい土地であり、小学校高等科を卒業した翌年、大阪に出て郵便局職員として働く。

その後、師範学校を経て、小学校教員となる。宮本が聞き書きを始めるのはこの頃からであり、一九三四―一九三五年にかけて民俗学者の柳田國男や後に宮本のパトロンとなる第一銀行副頭取の渋沢敬三（後に日銀総裁、大蔵大臣を歴任）との出会いが、民俗学の道へ進むきっかけとなった。

宮本は早速全国組織「民間伝承の会」の設立に関わり、一九三九年に上京して渋沢が主宰するアチックミュージアム（一九四二年に日本常民文化研究所と改称、現在神

奈川大学に附置）に入り、渋沢の命を受けて、日本全国の民俗調査に携わった。宮本は戦前から民俗調査に加えて民具収集などを各地で積極的に行ってきたが、残念なことに、第二次大戦の戦災で、原稿一万二〇〇〇枚、採集ノート一〇〇冊、写真その他の調査資料の一切を焼失してしまった。

戦後、宮本はいったん郷里の周防大島へ戻って農業に勤しむが、ほどなく、食料増産対策、農地解放、農協育成や農業指導のために全国各地を回りつつ、再び民俗調査に力を注いでいった。戦後すぐから一九五〇年代前半にかけての瀬戸内海、対馬、壱岐、五島などでの調査を踏まえて、宮本は全国離島振興協議会の設立（一九五二年）に寄与し、自ら事務局長に就任するとともに、国に対して離島振興法の制定を強く働きかけ、一九五三年にとうとうそれを実現させた。続いて林業金融調査会を設立して山村の社会経済調査に従事し、『風土記日本』（全七巻）や『日本残酷物語』（全五巻＋現代篇二巻）の編集執筆などを進めた。

一九六二年に柳田國男が、一九六三年に渋沢敬三が他界すると、宮本は武蔵野美術



2003年に開設された周防大島文化交流センター（山口県周防大島町）。宮本常一の膨大な資料を収集・整理・保管しているほか、「郷土大学」など地域に密着した多彩な活動を行っている（2006年3月6日、筆者撮影）

大学に教授職を得、一九六六年に日本観光文化研究所を開設して所長に就任、機関誌『あるく・みる・きく』を発刊、一九六七年に宮本常一著作集の刊行が開始された。病気で入院を繰り返しながら、一九七七年に大学を退職した後は郷里である山口との関わりが大きくなり、周防猿回しの復活支援や大島郡東和町（現・周防大島町）に「郷土大学」（一九八〇年開講）をつくり、彼の地元の人々に対する働きかけを続けた。海外へも目を開き始め、台湾、アフリカなどを訪問調査した後、一九八一年に七三年の生涯を閉じた。

●フィールドワーカー・宮本常一

宮本が残した様々な記録は、その一部が『宮本常一著作集』（四六冊）として刊行されているが、今なお完結していない。著作数は、雑誌掲載も含め、確認されているだけでも二五〇〇点余に上る。前述のように戦前の記録・資料は一切が焼失しており、それを加えれば気の遠くなる分量の記録を行ったことになる。筆記記録に加えて、宮本はのべ一〇〇万点以上の写真も残している。これらの莫大な資料は、二〇〇三年に周防大島に設立された周防大島文化交流センターによって収集・整理・保管されている。二〇〇五年に毎日新聞社から発刊された『宮本常一写真・日記集成』を見ても明らかのように、宮本の調査スタイルは超人的といつてよいものであった。聞き書きを始

めた頃の宮本は、汚れたリュックにコウモリ傘を吊り下げ、脚にはゲートルを巻いてズック靴を履き、ときには物乞い間違えられることもしばしば、といった格好だったという。しかし、その宮本が村の古老などから聞き書きを始めると、多くの場合、それが夜中まで際限なく続くのであった。宮本は生涯でのべ約一二〇〇軒の民家に泊まらせてもらったという。

彼は稀にみる聞き上手であった。傍目には凶々しいようにみえても、「人間は誰もが話したいものを持っている」と述べて、それを自然な形で引き出すことが自分の仕事であると認識していた。一般に閉鎖的に見なされる農山漁村の人々が、ヨソ者である宮本をかくも受け入れていることは驚きだが、人々を信頼させる何かを宮本は持っていたに違いない。それは、彼がその人々と同じような貧しい農村の出身で、人々の喜怒哀楽を共感できたこと、そこに住む人の目で捉えようと常に努めていたこと、があると思われる。社会的なバックグラウンドが大きく異なる開発途上国のフィールドに我々が入るときには、対象をよく理解して入ることが当然必要だが、それでもなかなか宮本のようにはいかないだろう。そして、宮本はそれを改めてありふれた手帳や大学ノートに記録するのである。「今日はあまり調子がよくない」と言いながら、平気で一日に四〇〇字詰め原稿用紙四〇枚を書くのである。宮本は『宮本常一著作集』

の発刊記念の挨拶で「飯を食うために書いた。腹にたまっている糞をなめているようなものだから、読まないでほしい」と述べたというが、生きていくために書くという執念がにじみ出ているかのようである。

彼の書いたもののほとんどは「記録」であっていわゆる「論文」ではない。仮説を立てて検証したり、先行研究や理論モデルを意識したりしたものはない。良質の紀行文であり、調査報告である。しかし、そこには彼の調査対象となった人々や地域に対する暖かな眼差しやそれらの未来に対する思いが溢れている。宮本は学界や研究者など特定の誰かを対象として書いてはいないが、不特定多数の誰かが読んでくれることを想定して書いてはいたと考えられる。

それは、宮本が記録に残そうと思ったものが、戦後日本の経済復興や高度経済成長の陰で忘れ去られ、見捨てられ、省みられなくなつたものだからである。『忘れられた日本人』、『庶民の発見』、『日本残酷物語』など彼の著作の題名からも想起されるように、彼は努めて名もないごく普通に生きてきた人々からの聞き書きを続けた。宮本の聞き書きによって、農山漁村に生きる人々の本音や思いが吐露され、それが世に出されることによって、何らかの形で国や地方自治体の農山漁村振興の施策に生かされることを願うのは当然のことであろう。しかし宮本は、こうした活動を通じて自らがリーダーとなり、社会運動を強力に進



周防大島文化交流センター内に展示された地元の漁労器具。このほか、農具や工具も多数展示されている。宮本常一はこうした民具の収集・展示を各地に進めた。センター内右奥の別室には宮本常一の蔵書などが保管されている（2006年3月6日、筆者撮影）

めていこうとはしなかった。当時思想界に影響を与えていた社会主義イデオロギーや反体制運動とも距離を置いた。多くの活動家が宮本を現状肯定主義者と見なしたが、宮本は活動家の社会運動とは一線を画したまま、日本全国の農山漁村を歩き続けた。

●フアシリテーター・宮本常一

宮本常一については、彼が残した膨大な記録・著作・写真とそこに記載されている記述が民俗学の観点から注目されやすいが、それを生み出した彼の聞き書きは、自分の必要な情報を聞き出して終了といった一方通行ではなかった。彼は人々の話をじっくり聞きながら、それに共感し、自分の経験してきた様々な農山漁村の話をインプットし、この地域をどうしていったらよいのかを一緒に真剣に語り合うのであった。宮本

は農家の出身で、しかも戦後しばらくは全国をまわって農業指導を行った経験があり、ヨソ者とはいえ、彼の話にはしっかりと裏づけがあったので、その地域の人々にとってもそれなりの説得力があったものと思われる。人々は宮本に話を決めて合わせてはいないし、宮本も自分の考えに人々を無理やり合わせようとはしていない。

宮本は、地域開発は地域の人々が主体とならなければ実現できないことを強く主張し、人々が自分たちの地域をどうしたいのかという主体性を発揮できるように意識づけを行っていた。だからまず聞くのである。

そして人々が辿ってきた生活や人生の話を肯定的に受け入れ、価値判断を示さず、まずは共感し、人々の思いを自分も共有しようとする。たとえそれが作り話や嘘であったとしても、である。むしろ、そうした話をしたという事実を受け入れるのである。

それらを受けて、宮本は自分の経験談や全国の他の地域の人々の話を適宜していく。

宮本の著作には、その多くにこうしたプロセスが描かれている。すると、前述のように、その地域について行政などの一般的な説明とは異なる事実や感情が人々の口から吐き出されてくる。宮本は丹念にそうした話を記録し、残していったのである。

地域開発における地域の人々の主体性を最重視する宮本は、農山漁村の生活の苦しさや貧しさからくる諦め・絶望感や行政への依存心を十分に理解していたが、何とか人々が自分たちの地域を守り、生活を改善していつてほしいとの願いから、様々な働きかけをした。例えば、佐渡島の小木で彼らは人々に民具採集を呼びかけた。技術進歩のなかで忘れ去られた農具や様々な道具を掘り起こし、それにまつわる物語を人々の心の中から手繰り出すなかで、自分たちの地域への思いを表出させ、何らかの具体的な行動へ結びつけさせることを目指した。最初は多くの人々がその意図を訝しがっていたが、彼らが持ち寄った民具や道具を集めて民俗博物館が作られた。それが地域振興の次の展開へ向けての出発点となった。

宮本が関わった地域の多くがこのような動きをみせたわけではない。むしろ、少なからぬ地域では補助金に頼ることを選択し、自分たちの運命を地域の外の力に委ねていった。宮本はこうした状況を「国内植民地」といつて嘆き、日本の地方の将来を深く悲観していた。その一端には、彼が離島の自立を願って成立に奔走した離島振興法が、彼の思いとは裏腹に、離島の行政への依存を逆に高める結果をもたらしたことがある。また、彼が支援してきた新潟県のある過疎の村での村おこしの気運が、当時の田中首相による日本列島改造論に基づく大型プロジェクトによって水泡に帰した経験もあったことだろう。

彼には子供向けに書かれた著作があるが、そこには日本や地域の将来を担う子供たちへの期待が溢れている。悲観しつつも、宮本は全国をまわって名もなき人々から聞き書きをしながら、彼らを励まし、元気づけ、少しでも自分たちの地域を主体的に改善していこうとする動きが現れてくることを願っていたのである。

●宮本常一を受け継ぐ人々

宮本常一が亡くなってから二五年が経った。国民所得は上昇し、農山漁村も都市とさほど変わらぬ生活水準を享受できるようになった。かつて日本の農山漁村に染みついてきた貧困や困窮の世界は遠い昔話となった。宮本がまわった日本各地の人々が願



特集／農村開発と農村研究

っていた「貧困からの解放」は達成された観がある。みんな幸せになったはずである。

しかし、生活水準の上昇と引き換えとなるかのようには、日本の農山漁村はその姿を大きく変えていった。高度経済成長を遂げた一九六〇～七〇年代の農山漁村における過疎、人口高齢化、後継者不足といった状況は、現代においては一層拍車がかかっている。多くの農地が耕作放棄され、木材価格が低迷したままの森林が間伐されずに放置され、財政問題に端を発する市町村合併の推進の下で、補助金や公共事業に依存した「国内植民地」的状況がより恒常化した。宮本が懸念した状況はより深刻化した。

経済のグローバル化が進み、物流が大きく発展して、我々は世界中から安く良質の製品を容易に手に入れられるようになった。外国から大量の農産物、木材、水産物が輸入され、それが都市の消費者どころか、それらの産物を生産していたはずの農山漁村の商店にも並ぶ時代になった。食品加工用の原材料もその多くは廉価な外国産である。宮本が鼓舞してきた地域の主体性はこれからどのように発揮できるのだろうか。

宮本常一の教えを直接・間接に受けた人々が様々な活動を始めている。聞き書きや映像を通じて、忘れられて消えていく日本の地域社会・文化・民俗を記録し続けている人々がいる。あるいは、ヨソ者として地域に入って、そこに住む人々が主体的に地域資源や地域の価値に「気づき」、そこか

ら何らかの主体的活動が生み出されるように働きかける人々がいる（これらの活動には「地元学」、「あるもの探し」、「地域学」などの名前と呼ばれる活動が含まれる）。

地域おこし、グリーンツーリズム、エコツーリズム、里山保護、有機農業などの活動に関わる人々の中には、様々な経路で宮本常一に連なる者が意外なほど多い。地域資源に目を向けた地域主体の地域づくりを標榜する動きが各地で散見されてきているが、現状の大きな流れからすれば、こうした活動は水滴程度に過ぎないかもしれない。しかし市町村合併の嵐のなかで、貧困からの解放とは違った意味での、地域やコミュニティの生き残り戦略となるだろう。

●地域研究者と開発実践者の融合

以上述べてきたように、宮本常一には、フィールドワーカーとしての側面と同時にファシリテーターとしての側面があった。

農山漁村振興の観点に立てば、彼はそれらの戦略立案や計画作成を行ったわけではないし、農林水産業発展に関する理論的貢献をしたわけでもない。では何をしたのかといえば、農山漁村の普通の人々の肉声に耳を傾け、共感し、その本音を記録し、そこから地域や日本全般の農山漁村振興の直面する本質的問題へどう取り組むべきかを考察したのである。農山漁村振興の行政担当者からすれば、宮本は有能な情報提供者にはなり得ても、それ以上の存在ではない。

しかし、宮本に出会った人々にとっては、自分たちを励まし、やる気を起こさせ、自分たちの地域を真剣に考えるきっかけを与えてくれた「好ましき」ヨソ者であった。実際に本人に会ったことはなくとも、彼の

著作を読んで、農山漁村振興を真剣に考え始め、行動を起こした人々も存在する。彼の功績には、「糞のようなもの」と自ら卑下した膨大な記録だけでなく、形に残らないが農山漁村の人々の心に多くの何かを残していったことも含まれるのではないか。その意味は決して矮小化できないだろう。

植民地支配から独立したものの、開発援助の恩恵を受けざるを得ない開発途上国には、こうした宮本常一のような人物がどれくらい存在するのだろうか。地域の主体性を強調することは、国民統合を是とした国家形成にとってマイナスとなるだろう。宮本が日本で採ったような行動は、多くの開発途上国ではまだ非現実的かもしれない。

とはいえ、対象となる地域社会やそこに暮らす人々を十分に理解することなしに真の共感はできないし、真の共感なしに人々を励ましたり、何らかの主体的行動を促したりすることも無理である。開発途上世界とどう関わるかを考えるとき、宮本常一のなかに、フィールドワーカーとしての地域研究者とファシリテーターとしての開発実践者との融合の姿が見出せるのである。

（まつい かずひさ／アジア経済研究所 地域研究センター）